

6月18日 守る連絡会 学習会 ミニ講演

「内部被曝による子どもの健康障害」 (健康のひろばへの投稿を一部改編)

クリニックふれあい早稲田 院長 大場敏明

3月11日の東電福島原発事故は、人類史上かつてない規模の放射線汚染をもたらしています。今なお危機含みの不安定な状態は收拾できず、未曾有な放射線汚染物の地中・水中への流出が続いています。

今、私たちに最も求められているのは、放射線被曝とくに内部被曝を常に意識した、予防と対策をとることで、原発被曝者の健康診断も長期的に行っていく必要があると思われまます。

(原発地域住民・福島県こどもの生活場所などの放射線量測定・・

関東近県での自治体での測定が、住民の声に押されて、急激に広まっている

住民個人の被曝量測定の提案 国立がん研究センター・嘉山理事長 6/8

放射線被曝は、外部被曝と内部被曝に分けられます。外部被曝は、医療用X線検査が身近な例で、広島・長崎の原爆炸裂(ピカ)が悲惨な最悪被曝です。全身をガンマ線と中性子線が貫きました。

内部被曝は、吸いこんだり飲みこんだりして体内に取り込まれたさまざまな放射性物質の極微小粒子から、長期間にわたって繰り返し照射されるアルファ線とベータ線による被曝をいいます。これは細胞レベルでの至近距離からの被曝で、微量でも危険であるとされています。

肥田舜太郎著「内部被曝の脅威」(2005年) 矢ヶ崎克馬著「隠された被曝」(2010年)

原爆症認定裁判の最大の争点(入市被曝者などの認定)でした。イラクの劣化ウラン弾被害も、内部被曝によるものと考えられています。

裁判では、直接被曝=急性障害だけを原爆症としてしか認めない政府の切り捨て政策に対して、原告被曝者・支援の研究者は、残留放射線障害・内部被曝障害=晩発障害も原爆症として認めろとの戦いでした。判決では、原告被曝者が、連戦連勝し、原告被曝者の全員が被曝者として認定され・補償をかちとっている。肥田舜太郎先生は、原告の証人としてなど大活躍して、原告勝利に大貢献された。著書「内部被曝の脅威」も、イラクなどでの劣化ウラン弾被害の告発のために書かれたが、原爆訴訟でも証拠になった。

とくに放射線の影響を受けやすい胎児と子どもに発症してくる恐れのある先天障害や10年後、20年後の晩発障害(悪性腫瘍、免疫異常など)に注意が必要です。

放射線障害には 急性障害と晩発障害がある。 政府発表の『直ちに健康に障害が出ることはない・・』とは急性障害のことだけを言っていた、原発労働者には大問題

地域住民・子供達の問題の多くは、晩発障害 長期障害が問題で、 その主因は 内部被曝です。

内部被曝は限りなくゼロが望ましいので、子供たちの被曝を少なくとも年間1mSv以下(外部+内部)=0.114 μ Sv/時に減らすキャンペーンが、福島はもとより、茨城、関東各県で取り組まれています。関東で最も高い線量の、柏・流山・松戸・三郷・足立で、子供たちを放射線から守る運動の取り組みは、次世代への我々の歴史的責務ではないでしょうか。

<放射線> ガンマ線 アルファ線 ベータ線 中性子線

ガンマ線 エックス線と同種 まっすぐ放射 貫通力が強い

距離の二乗に反比例して減衰 体外からの被曝の主役 (外部被曝・体外被曝・直接被曝)

簡易測定器・ガイガー計測は、 ガンマ線の測定

・ ・ 土壌の放射線物質からの放射で、距離の二乗に反比例して減衰

* 地表面 — 50 cm — 100 cm と減衰

アルファ線 ウラン 238 プルトニウム 239 から放出

飛距離 0.1 m m 体内では 0.04 m m 赤血球・リンパ球の大きさ 0.008 m m

貫通力は弱いが生体距離から長時間に暴露し続ける 細胞障害性は高い

ベータ線 セシウム 137 ヨウ素 131 から放出 飛距離 1 c m 体内では 2.5 m m

電氣的相互作用は大きい 周囲の細胞、染色体に与える影響は格段に大きい

セシウム 137 物理的半減期 約 30 年 ヨウ素 131 物理的半減期 8 日

セシウム 134 物理的半減期 2 年

I CRP は、その発足の当初から、アルファ線とベータ線による内部被曝を排除してきた。